

後宮に男として潜り込  
んだカントが皇帝直属  
の宦官長に初夜で暴か  
れ「去勢の必要がない  
な」と龍の寝台で飼わ  
れる話

「が……っ」

寝台に叩きつけられた背中に、黒曜石の冷たさが突き刺さる。その冷氣すら瞬く間に蒸発した——腹の底で、黎淵の龍脈の気が暴れ狂っている。

蘇嶺の手首は頭上で交差させられ、龍柱から垂れた黒い組紐に括られていた。暴れた痕で紐が肉に食い込み、手首が赤く腫れ上がっている。

「くそ……っ、離せ……っ！何を、して……ッ」

声が震えている。それが己の恐怖だと認めたくなくて、奥歯を噛み締めた。

黎淵は答えない。蘇嶺の臍の下に右掌を押し当て、じわりと力を込めている。節くれだった武人の指。宦官の手ではない。蘇嶺が入宮初日に見た、あの指だ。

掌の直下で、灼熱が脈打った。蘇嶺の腹の奥を何かが蠢く。内臓を裏返されるような圧迫感に、背中が寝台から浮いた。

「うお……っ、腹が……っ、何か来る……っ！」

股間が——おかしい。

蘇嶺は自分の下半身を見下ろした。衣は腰まで剥がれ、褐色の肌に汗が浮いている。そしてその下で——信じがたいことが起きていた。

ペニスが縮んでいく。

指一本の長さになり、親指ほどになり、やがて——吸い込まれるように消えた。睾丸が体内へ引き込まれ、代わりに皮膚が裂けるように開いていく。縦に。ゆっくりと。

「な……んだ、これ……っ、嘘だろ……っ、俺の……っ」

薄紅色の肉が覗いた。裂け目。出来立ての、まだ形が定まりきらない——女の器官。

「あ——おおおおッ!!」

絶叫した。痛みではない。自分の身体が目の前で別のものになっていく恐怖だ。二十年間この身体で馬を駆け、弓を引き、草原を渡ってきた。その身体が——奪われていく。

黎淵が掌を離した。蘇嶺の股間には、数分前までなかったものがある。まだ湿り気もない、薄紅色の裂け目。

蘇嶺は息を忘れた。視線が己の股に縫い止められる。

「——去勢の必要がないな」

頭上から声が降る。低く、静かで、どこか愉しげに。

蘇嶺は黎淵を見上げた。龍の香炉の煙の向こうに、顎に古傷のある男の顔。笑ってはいない。だがその目の奥に——獣が獲物を見つけた時の、あの光がある。

「ただし——騾は必要だ」

黎淵の指先が、出来立ての裂け目をなぞった。

「ひっ——」

電撃が走った。知らない場所から、知らない感覚が突き抜ける。蘇嶺の腰が跳ね、縛られた手首が紐を軋ませた。

裂け目から——じわりと、透明な液が滲む。

「……っ、なんだ、これ……っ」

蘇嶺は自分の反応が理解できない。触られたただけ。たった一度なぞられただけで、身体が勝手に反応している。知らない場所が、知らない液を出している。

「お前の身体は、もう答えを出している」

黎淵の指が裂け目を割り開いた。蘇嶺は見ないようにした。見たくない。だが感覚は遮断できない。指の腹が柔らかい肉を押し広げ、小さな突起を探り当てる。

「そこ——やめろっ、何だそこは……っ」

「クリトリスだ」

黎淵の声に感情はない。蘇嶺の身体を検分する役人のような冷静さで、指の腹がその突起を圧した。

「ッ——お……っ♡」

声が漏れた。蘇嶺の知らない声。二十年間使ったことのない喉の震え方。

（何だ今の声……っ、俺の声じゃない……っ）

黎淵の指が円を描く。ゆっくりと。突起を包皮ごと捏ねるように。蘇嶺の脚がびくびくと痙攣し、太腿の内側に鳥肌が走った。

「やめ……っ、触るな……っ！俺は男だ、俺にそんな場所  
は……っ」

「ある」

黎淵が端的に断じた。指の動きが速くなる。

「おっ、おっ、おっ……♡ち、ちが……っ、こんなの知ら  
な……っ♡♡」

蘇嶺の腰が勝手にうねる。逃げようとしているのか、押し  
付けようとしているのか、自分でも分からない。

——ここで暗転する。

三日前のことだった。

後宮の門は巨大だった。蘇嶺が知る世界——果てのない草  
原、風の匂い、馬の体温——とは何もかもが違う。石造りの  
壁。沈香の煙。宦官たちの擦れた足音。

蘇嶺は衣の下で拳を握った。

肌に合わない。薄い衣が身体に纏わりつき、風を切る感  
がない。弓を引くために鍛えた肩が窮屈で、広い胸が宦官の  
衣に圧されている。

母が死んだのは、去年の冬だ。

草原の辺境の、土壁の家。痩せ細った手が蘇嶺の頬に触れ、  
掠れた声で言った。

「後宮の蔵書楼に、密勅がある。一族の無実を記したもの。  
取り戻しなさい」

母はそれだけ言って、目を閉じた。それが最後だった。

蘇嶺の一族は北方遊牧民。二十年前、朝廷に謀反の濡れ衣を着せられ、皆殺しにされた。母は乳飲み子の蘇嶺を抱えて逃げた唯一の生き残り。草原の果てで蘇嶺を育て、馬の乗り方を教え、弓の引き方を教えた。

馬術と弓と、風を読む目。それが蘇嶺の武器だった。すべて男として研がれてきた刃。去勢を偽装してまで後宮に入っただのは、その刃を一族のために使うためだ。

同郷の太医を買収し、偽の去勢証明を手に入れた。完璧だと思っていた。

入宮初日。宦官見習いとして、蘇嶺は膝をついた。生まれて初めて人に膝を折る。こめかみの血管が浮くほど齒を食いしばりながら、頭を垂れた。

任務のためだ。密勅を見つけ、奪い、逃げる。それだけでいい。

二日目。黎淵を初めて見た。

宦官たちが整列し、巡検に来た大男が列の間を歩いていく。足音がしない。あの体格で、気配を消せる。蘇嶺は顔を伏せたまま、視界の端に黎淵の手を捉えた。

長く、太く、節くれだった指。宦官の手ではない。弓を引く指でもない。剣を握る指だ。

黎淵が蘇嶺の前で、一瞬だけ歩を緩めた。ほんの半歩分。

何も言わず通り過ぎた。

蘇嶺の首筋を冷たい汗が伝った。見られた。何をかは分からない。だがあの男の目は——何かを見抜いている。

蔵書楼への侵入経路を探ったが、夜間警備が厳しい。黎淵の直轄の暗衛が巡回している。影すら通さない。

そして三日目——初夜検査の通達が来た。

新入りの宦官は全員、宦官長の検査を受ける。去勢が正しく行われたか確認する名目で。

蘇嶺の血が引いた。裸になれば終わりだ。バレたら斬首。

しかし拒否すれば、それ自体が疑惑を呼ぶ。逃げるにも、まだ密勅を手に入れていない。

蘇嶺は懐の小刀に触れた。母の形見の、北方鍛冶の小刀。最悪の場合——黎淵を殺してでも逃げる。

玄武閣への廊下は暗かった。松明の光がちらちらと揺れ、石壁に蘇嶺の影を躍らせる。歩くたびに空気が重くなる。肌がちりちりと灼け、腹の奥で何かが疼く。

(なんだ、この感覚は……)

龍脈の気だと、蘇嶺はまだ知らない。未去勢の身体が、龍脈の中核に反応し始めていることも。

玄武閣の扉を開けた。

黒曜石の床。龍を象った香炉から立ち昇る白檀の煙。帳に囲まれた漆黒の大寝台。そして——寝台の縁に腰かけた黎淵が、蘇嶺を見ている。

「衣を脱げ」

蘇嶺は脱がなかった。

懷に手を入れ、小刀の柄を握った。心臓が喉を叩く。だが手は震えていない。弓を引く時と同じだ。狙いを定め、一撃で仕留める。

黎淵は動かなかった。ただ言った。

「抜く前に言っておく。お前の買収した太医は、昨日処刑された」

蘇嶺の指が凍った。

「偽宦官の罪で、お前の首が飛ぶのは明日の朝だ。——だが、俺はまだ上に報告していない」

蘇嶺は小刀を抜いた。刃が白檀の煙を裂く。

黎淵は素手で刃を掴んだ。

血が掌を伝い、黒曜石の床に落ちた。ぽたり、と。眉ひとつ動かさない。蘇嶺の渾身の一撃を、あの武人の指が素手で止めている。

「お前には選択肢がある」

小刀を捻り上げられ、蘇嶺は手首を極められた。組み伏せられ、寝台に押しつけられ、手首を龍柱の組紐で縛り上げら



れる。暴れれば暴れるほど紐が食い込み、やがて——衣を腰まで剥がれた。

「斬首台か、この寝台か」

黎淵の血に濡れた掌が、蘇嶺の下腹部に押し当てられた。

そして——龍脈の気が、蘇嶺の身体に流し込まれた。

冒頭の続きだ。

蘇嶺が何を捨ててここに居るか。母の遺言。一族の名誉。二十年間磨いてきた、男としての刃。

——ここからの蘇嶺の悲鳴は、冒頭より深く刺さる。

「戻せ……ッ！」

蘇嶺は叫んだ。声が裂けた。

「元に戻せッ！俺の身体を返せッ！」

黎淵は無表情のまま蘇嶺を見下ろしている。

「龍脈で変わった身体は戻らない」

淡々と。残酷なほど淡々と。

「お前はもう、去勢以下だ」

去勢以下。男でもなく、宦官でもない。ペニスもなく、代わりに女の裂け目がある。蘇嶺が最も——最も嫌悪する存在に、自分が変えられた。

涙が出かけた。蘇嶺は奥歯を噛み砕く勢いで堪えた。泣くものか。こんな男の前で。

「……殺せ」

搾り出した声は掠れていた。

「斬首でもなんでもしろ。こんな身体で生きるくらいなら——」

「殺さない」

黎淵の指が裂け目に触れた。

「ひっ——やめ……ッ」

「お前は使える。この身体のまま、俺のものとして」

黎淵の指が裂け目をゆっくりと割り開く。出来立ての粘膜が空気に触れ、蘇嶺の全身に鳥肌が奔った。

「触るなっ……！俺はこんな身体……認めな——おっ♡」

指の腹がクリトリスを圧した。

蘇嶺の腰が跳ねる。知らない快感が背骨を駆け上がり、頭の芯を揺さぶった。

（なんだ……っ、なんだこれ……っ♡♡ こんな小さな場所を押されただけで……っ）

「お前は今日まで、この感覚を知らずに生きてきた」

黎淵の指がクリトリスを包皮ごと捏ね始める。円を描くように。ゆっくりと、しかし執拗に。

「おっ……おっ……やめ……やめろって……ッ♡♡ そこ……変になる……ッ♡♡」

「変になるのではない。お前の身体が目を覚ましている」